

うけつぐ伝灯 伝えるよろこび 『念仏者の生き方』(下)

相愛大学教授
釈 徹宗

大阪府池田市・如来寺住職。NPO法人「リライフ」代表。近著『落語に花咲く仏教—宗教と芸能は共振する』で第5回河合隼雄学芸賞受賞。『随縁つらつら対談』(本願寺出版社)ほか著書多数。



「様式に救われる」ということ

私たち浄土真宗の歩みが、こうして数百年にわたって続けられてきたものですから、日常生活の中に独特の様式をずいぶん生み出してきました。これは浄土真宗の誇るべき伝統だと思います。

本日と言えば、皆さんのように門徒式章を着けるということも一つの様式です。あるいは、みなでお正信偈をおつとめするというのも、中世の頃から確立してきた私たち浄土真宗の独特

の様式です。本堂の様式も、内陣と外陣を一直線に仕切って、しかも外陣を大きくとるというのは、これも中世に確立した真宗独特の本堂の様式です。ほかの宗派の本堂は、中心にどーんと内陣があって、余白が外陣のようになっています。

なぜ真宗の本堂は、こんな独特な形になってきたんでしょうか。私が想像するに、これはお扉を閉めたら、大広間として使えるからだと思っんです。真宗門徒というのは、手に手を携えて、みなで協力して生きてきましたから、

いえます。

この様式が、実は馬鹿にならない。私たちは、頭で覚えること以上に、様式に救われているということがあるんですね。人間というのは、そういうものなんです。

皆さんは「ユダヤ民族」という人たちをご存じでしょうか。これまでいぶん迫害され、差別され、虐殺されてきました。世界中のユダヤ民族全部合わせても一千万人ちょっと。東京都の人口より少ないぐらいです。でも、ノ

ーベル賞でいうと、物理、化学の分野だと二割ぐらいユダヤ民族が占め、経済、文学だと四割を超えるそうです。

すごく優秀ですね。たとえば、「現代人は三人のユダヤ人の影響から逃れることができない」などとも言われます。マルクス、フロイト、アインシュタインの三人です。たしかにこの三人がいなかったら、現代社会はかなり異なる

姿になっていたかもしれないね。

紀元一世紀にユダヤ民族は国が滅ぼされてしまったので、千九百年以上、世界中にバラバラにちらばって暮らしています。拡散すると民族自体がなくなってもおかしくないし、そうやってなくなっていた民族は人類史上たくさんあります。でも、ユダヤ民族はユダヤ民族であり続けることができた。なぜか。それは、ユダヤ教があったからです。ユダヤ教は生活の様式がきつ

全国門徒推進員のつどい
記念講演

格通知ももらった、初任給ももらったというとお仏壇に報告したりします。これもその家の一つの様式と



ちりしているんです。彼らは、その様式の通り暮らすがゆえに、どこで暮らしていてもユダヤ民族として成立するわけです。様式が自分の生きる力を根底から支えているのです。

仏道を歩む私たちの方向

そのような日常生活の中にある仏道について、今回、ご門主が伝灯奉告法要のご親教「念仏者の生き方」の中で語っておられますので、そこをご覧くださいませ。

私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられない無明の存在である

機嫌になったら、みんなその人に気をつかわないとしようがないでしょ。だから、みんな黙っちゃう。何も納得して黙っているんじゃないんですよ。不機嫌になったんじゃないから、おさまってるだけなんです。不機嫌で場を支配するコミュニケーションが習い性になってる人っているんです。それじゃダメじゃないですか。せっかくお念仏の教えをいただいたのだから、やっぱり「和顔愛語」というのは、すごく大事だと思います。

私は大学の教員を長い間勤めてきて、割と細かいことに怒るタイプで、すぐに怒るんですよ。そのうちに気がついてたんです。細かいことを怒りだしたら、どんどんど

全国門徒推進員のつどい 記念講演

ん気になるところが増える一方なんです。ちょっとしたことで腹立っちゃうん

ことに気づかされ、できる限り身を慎み、言葉を慎んで、少しづつでも煩惱を克服する生き方へとつくり変えられていくのです。それはたとえば、自分自身のあり方としては、欲を少なくして足ることを知る「少欲知足」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛語」という生き方です。たとえそれらが仏さまの真実事といわれようとも、ありのままの真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。

私は、この「たとえ、それらが仏さまの真実事といわれようとも」というところにしびれるんですよ。グッときます。それは、もちろん不完全なことしかできないけれども、歩むべき方向はそこにある、ということですね。だからこそ、浄土真宗だからといって

です。あ、これはいかん、怒りの連鎖が自分の中で始まっている。沸点がそうとう下がっていると自分で気づいて、「和顔愛語」をテーマにここ一、二年実行してるんです。これは、念仏者の姿はこうあるべきとか、念仏者の生き方はこうであるべきとか、そういう話ではないんです。その方向に歩みを進めるといいます。

ご門主は先ほどのお言葉に続いて、親鸞聖人のお手紙をひいておられます。

「あなた方は」今、すべての人びとを救おうという阿弥陀如来のご本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるのです」



何もなくていい、何をしてもいいという方向ではありませぬ。仏道ですから。「少欲知足」「和顔愛語」という方向へと歩みを進めていく。そして、その歩み突き詰めていけば、その身のままでお救いにあずかるという、そういうみ教えです。

特に「和顔愛語」というのは、自分自身でもテーマなんです。できるだけ穏やかな顔でいるということ。これは『無量寿経』というお経に出てくる法蔵菩薩のお徳なんです。慈しみの言葉を語るとか、穏やかな顔でコミュニケーションをとるのは、すごく大事だと思うんです。

時々ね、不機嫌で場を支配する人っているでしょ？ 不機嫌でね、なつもん勝ちなんです。誰かその場で不

親鸞聖人のご消息ですね。

阿弥陀さまのお心をいただき、お聞きしてるうちに少しずつ、無明の酔いがさめてくる、という表現がいいです



よね。先ほど(前号)紹介しましたご門徒のお話でも、「仏さまにお願いをしてしまふ……私なんかあかん……」とおっしゃるのも、教えを聞き続けていくからこそ、酔いが覚めて、自分の姿が見えてきたわけです。これが念仏者のあり方だとか、こういう行為が念仏者として正しいとか、こんな行為は念仏者として間違っているという話ではありません。その方向に歩んでいくんだ、ということが大事なんです。

「きたない言葉つかいたくない」

昔、コロナビア・トップ・ライトという人気漫画コンビがおられました。トップさんは人気者で、国会議員になってコンビを解散しました。では、ライトさんかというと、仕事がなくなりました。きちっと七三に分けて、背広を着て、直立してるような人だったので、司会業で食べていこうと、結婚式

しい言葉ばかり使いたいです」と言われたんです。私その時、あつ、それって「愛語」やなと思ったんですよ。「和顔愛語」ってそういうことだと思います。

念仏者は染香人

お念仏をとる生活をしている人は、本当に教えを聞いたら、よい言葉を使いたくなるといいですか、嫌な言葉を、人を傷つける言葉を使いたくないという、そういう方向へと、きつと歩みは進んでいくんだろうと思います。先ほど(前号)、お正信偈の「三不三信」についてお話ししましたが、そういうお念仏を相続する心というのは、

全国門徒推進員のつどい
記念講演

日常生活の中に様式として現れてくるんだ、ということをお味わいいただきたいと思ひます。そして、

の司会から村祭りの司会までどんなものも引き受けました。それで、司会で活躍できるようになったら、今度は残念ながら、喉頭(こうとう)がんで声帯を取らなければいけなくなられたそうです。その時、お医者さんから「食道発声」という方法があることを教わります。食道と食道は弁でふりわけられるようになっていて、飲み物とか食べ物は食道の方を通過して、空気は食道の方を通ります。声帯は気道の方であって、それを取れば、食道は残るわけです。その食道を振動させて発声します。しかし、それはものすごく茨(いばら)の道で、とても難しいことだそうです。

そこで、奥さんと一緒に手に手をとって、奥さんも応援するから一緒にがんばろうと二人で約束して、手術をされました。それでもなかなか声は出ません。いくらトレーニングして指導を受けても出ない。手術後で体の調子も

その様式が体に染みついた人、先人からのパスをちゃんとキャッチして次世代へパスを出そうとする人のことを、親鸞聖人はこうおっしゃっています。

「染香人」

念仏者をほめ讃(たた)える言葉として「妙好人」というのは大変有名ですが、親鸞聖人は「染香人」を最大級のほめ言葉として何度かつかっておられるんですね。これは、移り香(か)が体に染みみている人のことです。

染香人(ぜんかうじん)のその身(み)には

香氣(かうぎ)あるがごとくなり

これをすなはちなづけてぞ

香光莊嚴(かうかうじょうげん)とまうすなる

(註釈版聖典577ページ)

「かぐわしい念仏の心をもっている人は、その身から智慧の香氣(かうぎ)を放(はな)っているようである。このように香氣で飾られていることを、香光莊嚴と申しあ

戻らないし、イライラするし……。奥さんは叱咤(しつた)激励(げい)するけれども、それもうとうとしくて、かーっとなってそばにあった物をボーンとぶついたり、ということもあつたとお話ししてらっしゃいました。

私がお話を聞いた時は、ほんとなめらかにしゃべっておられて、立派に発声されてたんです。その時、「これね、私の今しゃべってる声、第二の声です」っておっしゃるんです。「第一の声は気がついたらしゃべっていたので、ありがたいともなんとも思わなかった。だから平気で使ってた。でもこの第二の声はね、私と家内と血と涙と汗でやっとなりに入れた声なんで、私ね、この声で、きたない言葉を使いたくないんです。みんなが喜ぶような言葉とか美

げるのである」

(現代語版『三帖和讃』68ページ)

仏さまの恵みやお慈悲を聞かせていただいて、それが、ご門主のご親教にもございますように、仏さまの真似事(まねごと)かもしれないけど、体にその香りが染みついていくという方向に向かっているかと思ひます。

ご聴聞(きんぶん)ありがとうございます。

(平成29年5月2日「全国門徒推進員のつどい 記念講演」より)

